

能と念仏

浄土真宗教学伝道研究センター所長
龍谷大学名誉教授

上山 大峻

筆者は「能」にはまったく知識をもたない西本願寺派の僧侶であるが、さる縁で知り合った廣田幸稔氏より、謡曲のなかに念仏が頻出することについて所見を寄せるように依頼された。なかでも『隅田川』は最も多く十四を数えるという。幽玄、静謐な能の雰囲気は、むしろ禪に近いと思っていただけに、そのことは意外であった。『隅田川』は、わが子梅若丸を人買いにさらわれ、それを探して京都から武蔵国の隅田川まで流浪した母親が、愛児の墓所にて悲嘆する物語である。その哀しみのところで念仏が頻出する。

この謡曲は世阿弥（一三六三～一四四三）の長男観世元雅（二二九四～一四三三）の作とされる。調べてみると、この当時、すなわち鎌倉から室町にかけての時代は、念仏を称えて極楽往生を願う信仰が一世を風靡していた時期に重なる。南無阿弥陀仏という阿弥陀如来の名を専ら称えれば必ず極楽に往生できるという教えは、法然（一一三三～一二二二）に始まる。それを親鸞（一一七三～一二六三）がうけて民衆に弘め、庶民の信仰の主流となっていた。その後には一遍（一二三九～一二八九）、蓮如（一四一五～一四九八）が出てさらに教えは庶民化し、日本の津々浦々にまで弘まっていたのである。『隅田川』は、まさにそのような庶民の信仰を彷彿させる雰囲気がいじみでている作品である。

ところで、念仏を日本全土に弘めた蓮如と「能」との関係は興味深い。蓮如の言行を第十子実悟が書き残した『実悟記』に

蓮如上人御法談ありしに、…各沈みかへりて侍りしに、法敬坊うたへと被仰しおませられかば、軀むねてうたひ被申けり。必ず誓願寺のとなふれば仏も我もなかりけりといふ所をうたはる。しばしうたはせられ、各の眠をさませられて、又御法談ありし也。只人によく法をきかせられて、信心の人出来るやうに、と仰也。

とある。蓮如上人が法話をされるとき、眠気をもよおしている聴衆を目覚めさせるのに能を謡わせて気分を引き立てたというのである。

謡曲『誓願寺』は世阿弥の作で、迷える和泉式部の靈魂が、一遍上人に念仏の功德を聞かされ、誓願寺の額を六字名号に書き換えることを頼む。上人が額を書き換え仏前に供えると、和泉式部が菩薩となって現れ、誓願寺の縁起を語り、法悦を仏徳讃嘆の舞楽で演ずるといふ構成である。謡いの中には念仏往生の教えが語られており、眠気さましのためだけではない。『誓願寺』第一場三段では、

シテ・ワキ「往生なれや何事も、みなうち捨てて南無阿弥

陀仏と称ふれば、仏もわれも無かりけり。仏もわれもなかりけり。南無阿弥陀仏の声ばかり。至誠心・深信心・回向発願の鉦の声、耳に染みてありがたや、まことに妙なるこの教へ、十声一声数分かで、悟りをも迷ひをも迎へ給ふをありがたき

と語られる。この内容は、念仏を申すことによつて仏と凡夫の念仏行者とが一体になるという「仏凡一体」の教えを語るもので、能の内容そのものが仏法教化の役割を果たしていたのである。蓮如の能や狂言への関心は、自分の趣味だけでなく、それを説法教化の「善巧方便」として活用することにあつたと思われる。

念仏が弘まるに当たつての一遍上人の功績も大きい。かれは蓮如に先立つて、念仏の教えを、理論よりもむしろ法悦を念仏踊りをもつて表現する方法によつて弘めた。これが民衆に受け容れられ、一世を風靡した。芸能的方法を民衆教化にもちいる素地はすでに、この当時できあがっていたのである。

「能」は、もともと「今様」と同様、庶民の中から生まれた娯楽であつた。「能」が流行するにしたがつて、公家や武士階級にまで支持されるようになって、貴族的な装いをするようになるが、内容を見ると、そのほとんどが実に庶民の生活や心情をそのまま反映した巷説である。観衆は物語に展開する喜怒哀楽に共感しながら楽しんだのである。能・狂言への熱狂ぶりは、相当なものであつたらしい。だからこそ、眠気さましの効用をもち、また念仏教化の手段として役立ったのである。

そうした大衆娯楽であるところから、それを特に庶民の信仰を集めている有名寺院では、勧進や法楽のために能や狂言を各

座の能楽師をよんで演じさせていた。そこに公家や僧侶なども招待などされて参加していたようである。寛正四（一四六三）年二月十一日に興福寺で薪能が催され、この日、蓮如が招待されている記録がある。蓮如は家族や弟子を同伴して観能に出かけた。招待者の経覚は、関白九条経教の息子で、母は本願寺出身の正林尼である。観能を通しての彼らの交流が伺われる。観覧者の熱狂ぶりは、名場面が演じられると「貴賤群衆之人、每能尽感声。万歳之美談、只驚耳目云々」（貴賤の群衆の人、能ごとに感声を尽くす。万歳の美談、ただ耳目を驚かす）とあるように興奮状態にあつたようである。また、観覧者にあらかじめ設えた席が満席となり、あふれた人が周辺の木に登つて観るというほど盛況であつたとも伝えられる。

このように大衆娯楽となつていた能の題材として、難しい漢文を中心とする禅仏教ではなく、庶民信仰として定着した念仏が謡曲のなかに出てくるのは、けだし当然のことである。「能」は、伝統芸術として芸能や文学からの研究対象にされるが、今日のテレビドラマのように、庶民の娯楽や思想・宗教などの世相の実態をそのまま映している時代の鏡としての一面からも注目されるべきであろう。

ちなみに、西本願寺に南北能舞台が存在し、いまなお毎年親鸞聖人の「降誕会」には祝賀能が催される。蓮如と能との因縁に由来するものである。

参考・籠谷真智子「蓮如と能楽」（『蓮如大系』所収、一九九六）

同氏『芸能史のなかの本願寺』（第一部・本願寺の能・狂言、二〇〇五）